

Column.6

イギリス免疫染色修行

猛烈に忙しい小さな病理専門の検査会社から、ドッシリとした大学病院の病理部に入職して半年、そのギャップに耐えられなくなった私は、いきなり教授室へ飛び込みこう申し出た。
「修行に出たいです！苦勞がしたいです！海外に修行に出させてください！」

その申し出は受け入れられ、英語が全く話せない私はその身1つでイギリスへ渡った。
「大学病院の研究室で免疫染色をして、研究の手伝いをする！別人に成長して帰国する！」という目的を果たすべく……

病理検査の技術、免疫染色の精度に関しては、日本のレベルの高さを痛感した。イギリスでは、切片は傷だらけ、シワだらけ、剥離し放題でも、目的の細胞さえ観察できればOK。寛容というのか、大ざっぱというのか……。そう思うと日本人の緻密さやこだわり、完璧主義な性格が切片1枚にも表れていると実感した。

免疫染色に関しても、寛容？大ざっぱ？で、まずは抗体の使用期限は切れているところから驚きだった。「大丈夫、まだ使えるさ」なんて笑いながら、試薬を手渡してくる。私が大切にしている言葉「一流の料理人でも腐った材料では美味しい料理は作れない。免疫染色も同じだ！」を、声を大にして言いたいのだが、英語がわからないため、「Oh……yeah……」と言うのみ。結局、染色性はよくなかったのに「お！染まってる、完璧！」なんて言われ、日本の検査技師のレベルは本当に高いのだなぁと実感した。日本で学び、資格を取って働けていること自体が、本当にすごいことなんだと思い知ったイギリス修行であった。

日本の技師よ！誇りをもつべし！！！！